目次

一　文語と口語……三
二　否定表現……一〇
《総合演習》……一五
三　禁止表現……一六
四　希望表現……一八
五　推量表現・意志表現……二〇
六　疑問表現・反語表現……二四
《総合演習》……二八
七　仮定表現・確定表現……三〇
八　伝聞表現・推定表現……三四
九　可能表現……三八
一〇　時制表現……四〇
《総合演習》……四三
一一　感動詠嘆表現……四四
一二　強調表現……四六
一三　敬意表現……五〇
《総合演習》……五五

本書は、古文読解の基礎力を短期間に、能率的に養成することを目標にして編んだもので、最初に、文語と口語の違いを整理し、ついで、「否定表現」とか「時制表現」とかいうような、文の型によって古文をまとめてあります。

使用にあたっては、まず、上段の「ポイント」を参照しながら、下段の《基本演習》を試みてください。できるだけ平易な文で演習できるよう配慮しましたので、完全に理解することを望みます。

次に、《発展演習》で正確な口語訳をする努力をしてください。

＊印を付した語句には、「重要語句」の箇所にその意味を示してあります。

《総合演習》は、既習事項の整理・確認を兼ねて作ってあります。

ノート形式をとって、解答欄を設けました。また、特に重要な事項は色刷りにして注意を促しました。大いに活用してください。

一　文語と口語

ポイント

(1) 助詞の省略

古文では、体言に付ける助詞「は」「が」「を」が、当然のように省略されることが多い。

(2) 体言の省略

古文では、連体形の下にくる体言や助詞「の」が省略されることが少なくない。

……ノ・……トキ・……コト

……トコロ・……モノ

などを補って訳すとよい。

基本演習

1　次の文の（　　）に適する助詞を補いなさい。

①　花（　　）咲き、鳥（　　）歌ふ。

②　川（　　）見れば、魚（　　）釣る人（　　）あり。

③　海（　　）荒ければ、船（　　）いださず。

2　次の文の口語訳の（　　）に適することばを入れなさい。

①　花は、ひとへなる、よし。

＝花は、ひとえな（　　）よい。

②　梅の白き、持ち来たり。

＝梅の白い（　　）持ってきた。

③　雨降るに、境を出でて行く。

＝雨（　　）降る（　　）に、国境を通過して行く。

ポイント

（3）用言の活用

《A》動詞の活用

①四段活用
◇ア・イ・ウ・エの四段に活用。
◇口語の五段活用動詞のほとんどが、この活用となる。

②上一段活用
◇イの段だけに活用。

③上二段活用
◇イ・ウの二段に活用。

④下一段活用
◇「蹴（け）る」一語。

⑤下二段活用
◇ウ・エの二段に活用。
◇口語の下一段活用動詞のほとんどが、この活用となる。

3 次の動詞の活用表を完成しなさい。

	語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
①	書く	書							カ行四段
②	見る	（見）			みる	みる	みれ	みよ	
③	閉づ	閉	ぢ						
④	蹴る	（蹴）			ける				カ行下一段
⑤	見ゆ	見			ゆ				
⑥	来（く）	（来）							
⑦	す	（す）							
⑧	死ぬ	死			ぬ				
⑨	あり	あ							

⑥カ変
◇「来（く）」一語。

⑦サ変
◇「す」一語。（複合語あり）

⑧ナ変
◇「死ぬ・往（い）ぬ」二語。

⑨ラ変
◇「あり・をり・はべり」

《B》形容詞の活用
ク活用とシク活用の二種類がある。

《C》形容動詞の活用
ナリ活用とタリ活用の二種類があるが、ナリ活用に注意。

4 次の形容詞の活用表を完成しなさい。

語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
高し	高	く から						
美し	美			し			しかれ	
白し	白							

5 次の形容動詞の活用表を完成しなさい。

語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
静かなり	静か		なり に					
堂々たり	堂々	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ	タリ活用

発展演習

1

動詞の活用の種類の見分け方については、次のようにします。

◇上一段――着る・似る・煮る・干る・見る・射る・居る・率る・用ゐる。　◇下一段――蹴る。
◇カ変――来。　◇サ変――す。　◇ナ変――死ぬ・往ぬ。　◇ラ変――あり・をり・はべり。
そのほかの語は、◇ア段の音から「ず」に続くもの――→四段〈咲かず・読まず〉
◇イ段の音から「ず」に続くもの――→上二段〈起きず・延びず〉
◇エ段の音から「ず」に続くもの――→下二段〈受けず・流れず〉

さて、次の――線の動詞の活用の種類（――行――段）を書きなさい。

① これより峰つづき、炭山を越え、笠取を過ぎて、あるいは石間に詣で、あるいは石山を拝む。（方丈）

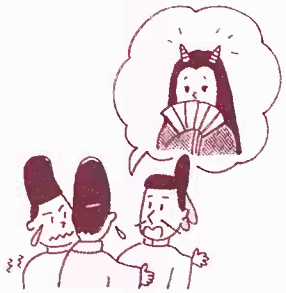
② 伊勢の国より、女の鬼になりたるをゐてのぼりたりといふことありて、……。（徒然）

③ *あしたに死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。（方丈）

④ うち割らむとすれど、たやすく割れず。（徒然）

重要語句

ゐる―いる・すわる・連れる。　**あした**―朝。



1							
ア	ウ	オ	キ	ケ	サ	ス	ソ
イ	エ	カ	ク	コ	シ	セ	タ

2

用言の活用のうち、古文読解にあたって重要なことの一つに、「それが何形であるかを知る」ということがあります。たとえば、「知らぬ人」「知りぬ」で、「知ら」（未然形）、「知り」（連用形）の活用形がわかると、下の「ぬ」の意味が接続上から判断できて、口語訳も正確にできます。次の、――線の用言について、何形であるかを書きなさい。

① 京に思ふ人なきにしもあらず。（伊勢）

② この影を見れば、*いみじう悲しな。（更級）

③ これをまことかとたづぬれば、昔ありし家はまれなり。（方丈）

④ 命死なば、いかがはせむ。（竹取）

⑤ 命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してけり。（徒然）

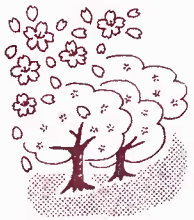
⑥ かねて思ひつるままの顔したる人こそなけれ。（徒然）

⑦ 静かなるいとまなく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。（徒然）

⑧ 高砂のをのへの桜咲きにけり　外山のかすみ　立たずもあらなむ（後拾遺）

重要語句

いみじ―はなはだしい・すばらしい。



2							
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
ア	エ	カ	ケ	サ	セ	チ	ナ
イ	オ	キ	コ	シ	ソ	ツ	ニ
ウ		ク		ス	タ	テ	